

華頂山大谷寺知恩教院は浄土宗の總本寺にして、鎮西流義なり。元祖円光大師宗風開發の靈地にして、吉水の

禪房とは是なり。初めは東の山腹今の勢至堂の地にして。大師入寂し給ふとぞ。「古は叡嶽の別院南禅院にして、慈慧

大師草創の地なり。夫より星霜かさなりて山門十二代の座主青蓮院慈鎮和尚、法然上人の弘法を隨信し給ひ、此地を寄

附し給ふ。昔は今の円山と封境一面にして吉水といふ」満誉和尚の代に至つて台命を蒙り、險阻を穿て平坦とし、今の

如く伽藍御建營あり。「洛東第一の大廈なり」山門に掲る華頂山の額は靈元法皇の宸筆なり。本堂大谷寺の額は後奈良

院の宸筆とぞ。須弥の壇上には円光大師の像を安置す、西の間には翠簾を巻上げて、壇上に神牌を崇奉る。大師の廟塔

は東の山上にあり。勢至堂に掲る知恩教院の額は後柏原院の宸筆なり。本尊勢至菩薩は安阿弥の作なり。「満誉上人化

人より授与し給ふ尊像なり」紫雲水は勢至堂の傍にあり、大師入寂の時聖衆來迎し、紫雲水面に顯れ異香水氣に遣れり

といふ、一心院は其南にありて、本尊阿弥仏は安阿弥の作なり。

抑元祖大師の伝記を鑑に、美作国久米南条稲岡の産なり。父は久米押領漆時国、母は秦氏なり、子なき事を歎て夫婦

諸ともに仏神を祈り、秦氏夢に剃刀を飲と覺て則妊身となり、長承二年四月七日午刻男子を誕。此時紫雲空にたなびき

白幡二流降くだりて、館の西なる椋の木に止り、鈴鉞四方にひゞき、紋彩日にかゞやき、七夜を経て天に登る、是より

此樹を誕生椋と号、後に仏閣を建て誕生寺と号して今にあり。赤子の字を勢至と号け、竹馬に鞭を打の齡より叡智にし

て、やゝもすれば西の壁に向ふの癖あり、九歳にして同国の菩提寺の室に入て学問す、院主勧学といふ人倩小兒の量を

勘ふるに、是只人にあらず、徒に辺鄙の塵にまじへん事ををしみて、比叡山西塔の北谷持宝坊源光がもとに登す。勸学が書翰に曰、進上大聖文珠一体とあり、時は久安三年二月十三日、入洛して勸学が書を持宝坊にいたす、源光これを披見して文珠の像を尋るに、小児のみ上洛せるよし使者申ければ、はやく児の聰明なる事を智せり。則十五日に登山し、源光試にまづ四教義を授るに、籤をさして不審をなす、疑ふ所みな天台の要論なり。不思議の事に思ひければ、我浅才にしていかでか此人を弟子とせんやと、同年四月八日に児を相具して、功德院の阿闍梨皇円がもとに入室せしむ。皇円其ちのすぐれたるを聞て驚て曰、去る夜の夢に満月室に入ると覺しが、さては此人に逢ふべき前兆なりとぞ悦喜しける。同年十一月美髮を剃、戒壇院にして大乘戒をうけたり。斯て恵解天然にして、四教五時の廃立かゞみをかけ、一心三觀の妙理玉をみかく、所立の義師の教にこえたり。阿闍梨感じて曰、学道をつとめ大業をとげ、天台の棟梁となるべしと、よりくす、めけれ共、是も又名利の学業なりとて、忽師席を辞して、久安六年九月十二日十八歳にして西塔黒谷の慈眼房叡空のもとに行て、我幼稚より隱遁の志願ふかきよし演ければ、少年にして出離の心をおこす事是法然道理の聖なりと感じて、法然房となし、実名を源光の源と叡空の空を摘んで源空と号たり。黒谷に蟄居をなし、出要を求るの心切なれば、何れの道よりか生死を離るべきと、一切経を披見せる事五遍なり。されば諸の経論についてつらく思惟せるに、かれもかたくこれも高し、遂に恵心の往生要集并善導和尚の釈義を以て指南とせり。かの釈には乱相の凡夫、称名の行によりて順次に浄土に生るべき旨を判ぜり。藏経披見の度に是を窺る事三遍なり。遂に其釈義に、一心専念弥陀名

号行住坐臥不問時節久近念々不捨者是名正定之業順彼仏願故、此文に至りて末世の凡夫弥陀の名号を念せば、彼仏の願に乗じて慥に浄土往生を得ることはりに伏し、承安五年の春四十三歳にして余行を捨、専修念仏に帰入せり。されば法然上人の宗風日本に弘まりしかば、山門の悪徒これを破せんとし、或は大原にして問答ありしかども、皆念仏の理に伏せり。建久二年の春は、後鳥羽院の逆鱗によつて四国に左遷せられしかども、承元元年十二月に勅許を蒙り、帰京して東山大谷に閑棲し給ふ、是当山の地なり。遂に建暦二年正月廿五日午の刻、法寿八十歳にて遷化し給ふ。是より毎歳正月十九日より一ヶ七日の間大法会あり、勅命に依て御忌と称し、音楽の妙なる声は聖衆来迎の思をなし、蘭麝のかほりは布金に満り、法筵の中日には知恩院宮法親王御焼香あり、寺務の大僧正を初末派の衆僧大会の坐列を正し、敬礼渴仰の分野去此不遠の極楽浄土、是皆大師の厚德顕然たりし謂なりけり。〔洛陽の貴賤袖をつらねて雲の如く群集するを、俗に御忌の衣裳くらべと名づくるなり〕

瓜生石は黒門の前にあり。〔むかし此石のもとより胡瓜の蔓生じて瓜を結ぶ、其瓜に牛頭天王の文字あり、是に依て粟田天皇の社内に納む〕塔中崇泰院には親鸞聖人廟塔の遺跡あり。〔大谷本願寺と号して、第八代蓮如上人の代、文明年中まで此地にあり、山門の悪徒宗義の繁栄をねたんで不意に押寄て破却す〕小鍛冶が井は山門の傍にあり。〔三条宗近名剣を打し時こゝに来て此水を用ひしとなり〕当山には桜数珠あり。〔糸桜、浅黄桜、世に名高し〕